

旅は道連れ、世は情け

女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

前夜

村本 邦子

立命館大学・女性ライフサイクル研究所

生まれてくるときも、死ぬときも、人は一人だ。子どもの頃から、そう自分に言い聞かせていたことを記憶している。どうしてそんなことを考えていたのか。決して孤立していたわけではなかったし、いつも人には恵まれてきたと思うけれど、振り返れば、アンバランスに早熟な女の子が、一所懸命、自分の人生を自分で背負う覚悟をしていたのだと思う。

この命題に若干の変更が加えられたのは、女たちのつながりのなかで子どもを産んだときだ。あの世とこの世をつなぐ道がどれほど暖かく慈愛に満ちたものかを知って、「生まれてくるときも、死ぬときも、人は一人だけれど、私たちは決してひとりぼっちじゃない」と安心した。生きることに緊張しなくなった。リラックスして人生に向かえるようになったと言えるだろうか。

人生は旅のようなものだと思っている。終点はもちろん、個としての生命が終わるところなのだけど、それがどんなところであって欲しいというようなものは、私にはない。どのようなところに行き着いたとしても、自分の歩んできた旅路こそが重要であり、終点において振り返ることができるとしたら(死に方によっては、できないかもしれないけれど)、「これが自分の旅だったんだなあ」と、格別の愛着を持って、しみじみ思い返せるものであって欲しい。

今、ちょうど旅の折り返し地点に近いところまで来て(私は自分の人生を百年と置いている)、来し方を振り返り、眺めてみるならば、いまだにとても不思議なことだったと思えてならないのが、女性ライフサイクル研究所という組織を立ち上げ、二十年も経営してきたという事実だ。これは、そもそもの自分の人生シナリオにはなかった。一人で開業するようなことは十

分あり得たけれど、組織を作って誰かと一緒に仕事を展開していくなどということは想像だにできなかった。

子どもの頃から、人と一緒に何かをやることは多かった。どういうわけか、いつも私の周囲には人が集まってくるので、たとえば、小学校の頃なら、休日、女の子たちで集まって、お料理を作って一緒に食べるとか、女の子と男の子と一緒に集まって、バドミントンをするとかいった会を作ったり、中学の頃なら、休日、近所の山に登るとか、試験前の勉強会をやったりとか、オカルト研究会を作って活動していたこともあった。それなりに、リーダーシップはあったのだと思う。人を集めて、楽しいことを一緒にするのは得意だった。

けれど、真剣に何かに取り組みまなければならないとき、人と一緒にやるのは、苦手だったような気がする。たとえば、大学院時代、研究会というのが嫌だった。マイケル・バリントの『治療論からみた退行～基底欠損の精神分析』(金剛出版)なんて本を読んでいたのだけど、「いったいなぜ人と一緒に本を読まなければならないのか。自分でとことん納得いくようにじっくり読む方がいいに決まってる！」と反発していた。自分のペースを保てるのが絶対条件だったし、いい加減な人たちに振り回されるのはごめんだと思っていた(これは、この研究会のことを言っているのではない。何をするにしても一般的に)。

加えて、組織というものに対する根本的不信のようなものがあつたように思う。これがいつの頃から、どのような形で芽生えていったのか、定かではない。子ども時代は無関心で、アカデミックに入ってから形成されたものだったかもしれない。あ

るいは、思春期特有の辛辣な大人社会への批判に由来するものだったかもしれない。巨大なシステムはいとも簡単に個を殺すし、そこに呑み込まれてしまうと、何か大切なものを見失ってしまうと感じていた。「命の命らしさ」とでも言おうか。

要するに、それは、警戒の手を緩めてはいけない相手だった。決して、自分が人生の裏街道を歩いてきたとも思わないけれど(むしろ、外からは逆に見られると思う)、世の中に表舞台と裏舞台があるとすれば、表舞台に立って大切なものを失うより、裏舞台で何か大切なものを探し続けたいと考えていた。思えば、子どもの頃、こよなく愛していたのはアルセーヌ・ルパンだった。

その昔、「組織と女性」(1996、『人間性心理学研究』14巻2号、162-170)というペーパーを書くために、女性たちのインタビューを行ったことがある。そのときに印象的だったのは、若い女性が就職するとき、組織に対する関わり方は、父親との関係を反映するのだということだった(ちなみに、私の父は組織と無縁な自由人だった)。もうひとつ、彼女たちは、「組織イコール男社会」と口を揃えて言ったのだ。大沢真理さんよれば(1993、『企業中心社会を超えて』時事通信社)、現代日本社会の特徴は、たんなる企業中心社会ではなく、家父長制を基盤とする企業中心社会なのだという。ここで、「家父長制」とは、女が「内助・補助・底辺」であり、男が「主人・基幹・トップ」であるというように、女と男が、職場、家庭、地域で直接・間接に結んでいる関係、すなわちジェンダー関係を示す。

子どもを産んでジェンダーの視点を得るまで、私は、女性問題に関心を持ったことがなかった。女であることにあまりに満足していたため(女で損なのはヒッチハイクができないことだけだと思っていたし、結婚して子どももできてからだけど、必要に迫られて、一度だけヒッチハイクもやってしまったので、今ではこれも消滅した)、深く考えたことはなかったが、世の中の表舞台とは、半分だけの価値観が支配する欠けたところで、そこに自分を位置づけることは、自分を十分に生かせられないという予感を持っていたのだろう。アルセーヌ・ルパンとは、男性的であると同時に女性的でもあり、憧れの対象ではなく、同一化の対象だった。

そんな私が、大阪と京都にオフィスを構え、今や、総勢十三人の女性からなる組織を二十年も維持してきたというのは、

まったくもって人生の不思議である。今、大学で教えていることにさほど不思議はないが、立命館大学というマンモス組織のなかで、(今のところという限定つきだが)意外にもおもしろがりながら、組織の役割を果たして働いているという不思議も、この延長線上にあるだろう。「どうやったら、二十年間うまくやってこれたんですか?」と尋ねられると、いつも答えに窮してしまう。たいして何も考えず、まったくの素人が、なりゆきでスタートさせた事業である。身近にモデルやノウハウがあったわけでもない。たしか、当時、「社会的起業」という言葉が出始めていたが、取り立てて、起業という意識を持っていたわけでもなかった。ただ、現在あるものが、要所要所で立ち止まり、よく考え、よく選択してきた結果であることは間違いない。

このあたりで一度、二十年を振り返ってみるのもいいかもしれない。事業として、本当にうまくやってきたのかどうかわからない。ただ、研究所が私たちスタッフにとって良い職場であり続けてきたこと、そして、それなりに長く社会に貢献してきたことには胸を張れると思う。そう考えれば、たしかに、まんざらでもないのかもしれない。これから、この連載で何を書いていくことになるのか、自分自身もまだよくわかっていない。今のところ、こんな私と女性ライフサイクル研究所の変遷をたどることで、武骨ながら叩き上げの組織論のようなものを書けるのかもしれないなどと思っている。経営学的に言って、それなりに根拠があることが浮き上がってくるのかもしれないし、逆に、偶然と幸運の連続だったということが見えてくるのかもしれない。少なくとも、今回、ここまで書いてわかったことは、それがジェンダー論を絡ませたものになるだろうということだ。

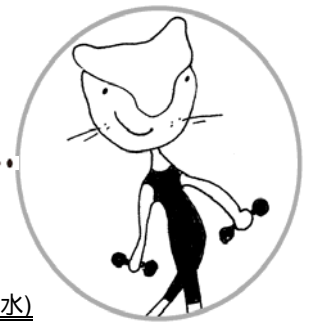
ある意味で、これは、二十年を振り返る旅日記のようなものだ。





講座 & グループのご案内

講座・グループは全て予約制です。大阪本社にお電話をいただくか、メールでお問い合わせ、お申し込みくださいませ。



子育てのコツを学ぶママのためのやさしい心理学講座

京都支所：毎月第2水曜、10:30～12:00

大阪本社：毎月第2水曜、14:00～15:30

料金：1回 1,000円 担当：津村 薫

次回は6月9日(水)

女性心理学フリートーク（大阪本社）

『母は娘がわからない』を読む：毎月第4月曜、10:30～12:00

料金：1回 1,000円 担当：津村 薫、下地久美子

次回は6月28日(月)

女性心理学フリートーク（京都支所）

日時変更しています。ご注意ください。

『心的外傷と回復』を読む：毎月第3火曜、10:00～11:30

料金：1回 1,000円 担当：渡邊佳代、村本邦子

次回は6月15日(火)

2010年度キッズ・サポーター・スキルアップ講座（大阪・京都）

保護者対応、ストレス対処、困った場面での対応、聴く技術、援助者の思考・行動パターンを見直すなどをテーマとした子育て支援者対象スキルアップ講座。受講料：10,000円（2日間8講・前納制・教材費込）

会場：【京都】8月5日(木)・6日(金) 9:30～16:50 「女性ライフサイクル研究所京都支所」

【大阪】8月19日(木)・20日(金) 9:30～16:50 「エル・おおさが(大阪府立労働センター)」

女性ライフサイクル研究所20周年記念イベント

女性ライフサイクル研究所20年の歩みとこれから

～人生の楽しみ、事業の喜び～

日時：2010年10月31日(日)13時～

場所：クレオ大阪中央・音楽ホール(地下鉄谷町線四天王寺夕陽丘下車/徒歩5分)

参加費：予約500円/当日600円(電話・メール・ファックスでお申し込みください。)

お支払いは当日、受付にて)

内容：【第一部】13:00-15:30

20年の活動報告

鼎談 村本 邦子(女性ライフサイクル研究所所長/立命館大学教授)

ゲスト：多田 千尋さん(芸術教育研究所所長/東京子ども美術館館長)

乳幼児教育、子ども文化、高齢者福祉、世代間交流について研究・実践。早稲田大学で「福祉文化論」を教える。「日本の社会起業家30人」の一人に選出。

上田 理恵子さん(株式会社マザーネット代表)

ワーキングマザーが、仕事と家事・子育ての両立をしていくうえでの問題点を解決し「仕事を続けてきてよかった」と実感できる社会を創造することを理念とし、起業。

【第二部】16:00-16:40

ピアノ・コンサート 演奏：パールノート(長川歩美+村本邦子)

曲目：ショパン「プレリュード」から

ラフマニノフ前奏曲「鐘」

ガーシュイン「プレリュード」ほか



Tel : 06-6354-8014

ホームページ : <http://www.flcflc.com>

E-mail : jyoseilife@flcflc.com



〔援助者向け〕〔女性・家族〕〔子育て～乳幼児から思春期まで〕〔ジェンダー・セクシャルハラスメント・性〕〔コミュニケーション・生き方・ストレス〕などをテーマに、講師派遣をいたしております。何なりと、お問い合わせください。